



博物館の窓

第98回

学芸員

持田 誠

「戦争柄」と呼ばれる柄の入った着物が、豊北で酪農をされていた岩井巖さんから寄蔵されました。「戦争柄」とは、軍艦や軍用機、兵士など、戦争に関する絵柄が入った着物のことです。

日露戦争から第二次世界大戦初期まで流行

戦争柄の由来ははっきりしていませんが、東海大学の乾淑子教授の調査によれば、日清・日露戦争の頃から第二次世界大戦までの50年間（1894～1942）に、日本で製作された着物です。軍部によるプロパガンダではなく、庶民の間での「流行品」だったと考えられています。戦争が日常的な時代の空気感が、そうした風俗を産み出したと云えそうです。

「新しい戦前」の世相は再び戦争柄を生むのか？

描かれている図柄から、日中戦争から太平洋戦争へと拡大していく時期のものと推察しています。

「新しい戦前」とも言われる昨今、こうした風俗が再び流行する世の中になっつてくのでしょうか？

戦争が日常化した世相を反映する「戦争柄」



戦争柄の着物。右は戦争柄のひとつである軍用機で一〇〇式輸送機と思われる。そこで、同機の製造期間から、寄蔵された着物の作られた年代を推定した。